

社会科教育における マス・コミュニケーションの問題 (第一報告)

—映画しいのみ学園における反応の研究—

石 黒 彰 二・織 田 長 繁

都 築 亨・中 尾 正 三

I 社会科教育と マスコミュニケーション

最近における新聞・ラジオ・テレビ雑誌・映画など通信・報道・娯楽のメディア(媒体)の発達と普及は目ざましく、現代の社会生活におけるマス・コミュニケーションの影響は、ますます強大となりつつある。このように強大な影響力をもつマス・コミュニケーションの機能を、進んで教育の分野に取り入れ利用しようとしたものが学校新聞・校内放送をはじめ、一般の学校向放送や教育文化映画などである。しかし生徒はこのように意図的調整や計画的利用のできるものとは違い、そのいちじるしく困難な一般のマス・コミュニケーションの影響下に日々生活しているのであって、そこには商業放送のゆがめられた商品の宣伝や、やくざ物映画の義理人情型娯楽をはじめとして、一見客観的にみえるニュースやルポルタージュの中に隠された真実のわい曲に至るまで、いろいろな意味における害悪がそれに随伴しているのである。社会科における歴史や経済や政治などの学習は、このようなマス・コミュニケーションの影響を無視しては十分理解されないし、また正しい指導もなされ得ないであろう。従って社会科教育を一層効果的にするためには、学校新聞や校内放送など意図的なメディアを積極的に利用することの必要なことはいうまでもないが、さらに新聞・ラジオ・テレビ・雑誌・映画などによるマス・コミュニケーションが生徒にいかにか受容されているか、また行動や態度にいかなる変化を与えつつあるかなどの実態を明らかにするとともに、それ

らに対する選択・批判の能力をいかにして習得させるかについてその方法を研究する必要がある。

この意味において、われわれは社会科教育の立場から、マス・コミュニケーションと生徒との関係、あるいはその生徒に対する影響とその指導法について実証的研究をすすめることとしたのである。

当校ではたまたま映画「しいのみ学園」の集団鑑賞を実施したので、以上の問題の研究の一環として、この映画に対する反応の調査をすることとした。

II 目的と方法

中学・高校生の映画に対する関係を調べる場合、映画に対する興味・好悪や観覧度数、地理的、経済的・社会的便宜の程度、家庭における映画への態度、観覧後の反応—行動や態度の変化—など種々の問題があるが、ここでは観覧後の生徒の反応調査に問題を限定した。

原作者・山本三郎、脚色・監督・清水宏によってなる映画「しいのみ学園」の梗概は次の通りである。

九州の大学で心理学を講じていた山本教授は、愛児有道が小児まひにかかり、現代医学では治療不可能と宣告されて以来、あらゆる治療法を試みしたが、子供の身体を元にかえすことはできなかった。やがて一年の就学猶子を経て、びっこをひきひき学校へ通うようになった有道は級友たちの冷遇に苦しまなければならなかった。まもなく次男照彦もまた小児麻痺の犯すところとなり、教授の心機一転の時がきた。教授は小児麻痺の妹を持って同様に苦しんでいた大学の教え子渥美かよ子や、有道発病以来治療に当たった女医田中先生と計り、家財をなげうって不幸な子等の学園建設を企てた。かくてできあがった

学園は「太陽の下で椎の実よ殻を破って芽を伸ばせ」という皆の願望を象徴して「しいのみ学園」と名づけられた。

この学園の教育のねらいは、集団生活を通して協同性を高め、相互にはげましあって自立の自信を強めさせることにあった。園児たちはかよ子の熱心な指導の下に次第に明るさを取りもどしていった。この頃入園した照子もまた、母親の危惧をよそに進んで汽車ごっこ遊びに加わり、自信を取りもどしていった一人であった。しかし学園の教育を背後において支えるカ一親の温かい愛情とはげまし—が必要なことを忘れてはならない。鉄夫は捨て児のようにして両親(継母)から学園にたくされた子である。鉄夫はようやく集団生活に慣れ、父親に手紙を出すまでになったが、返信を待つうち病気となり、かよ子が父親に代って書いた手紙を読むのを聞きつつ死んでいった。

この映画の脚色や演出について、技術上の問題はあろうが、それはここでは問題にしない。ここではこの映画の中に描かれたものを生徒がどのように受けとっているか、又その受けとり方にどのような学年差があるかを問題としたい。

団体観賞の期日は昭和30年7月16日(土)で18日(月)に次の形式の質問紙への記入を求めた。
無記名。

質 問 紙

映画「しいのみ学園」について研究の参考にしたいので感じたまゝを書いて下さい。

1. 男女 2学年組 中・高 1・2・3 A組・B組
3. 長い病気(1ヶ月以上)をした経験があるか 有 無
4. 家族や親類に盲・ろうあその他の不具者があるか 有 無

祖 父 母 兄 弟 お じ いとこ
母 父 母 姉 妹 お ば

次の文を読んであてはまるものに○をつけなさい。あてはまるものがないときは「その他」の項に書きなさい。

1. この映画をみて何を一番強く感じましたか。
 - イ. 小児まひの恐ろしさ。
 - ロ. 親の愛情のありがたさ。
 - ハ. 親の愛情の欠けていることのかなしさ。
 - ニ. いろいろな困難にめげず自分たちの手でつくっていかうとする態度。
 - ホ. 不具者としていじめられている子どもの気持。
 - ヘ. みんなの中でたすけあい、はげましあっていくなかまの気持。
 - ト. その他。
2. 有道兄弟やかよ子(しいのみ学園の先生)の妹のような子供たちはどうしてすくっていったらよいか。
 - イ. 宗教団体や人々の寄附で施設を多くつくればよい。
 - ロ. 学校にやらないで、家庭で十分に面倒をみてやればよい。
 - ハ. 国の手で施設を多くつくればよい。

ニ. 山本先生のような人々がたくさんでて学園を多くつくればよい。

ホ. そ の 他。

3. 照子の母(汽車ごっこに加わるのを引きとめた)についてどう思いますか。
4. この映画を見て全体としてどう感じましたか。

調査はわれわれ四名が分担実施した。なおこれに先立つ数日前、校長から全生徒に対して事前指導がなされている。校長訓話の内容は、(1)小児麻痺という病気の解説、(2)不具者であることは決して悲しむべきでない、むしろ禍を転じて福となす心構えと努力が必要であること、(3)有道の学校の教師に、もっと不具者に対する配慮がほしかったことなどであった。この事前指導とともに、観覧後調査までに一日おいたこと、新聞・映画・雑誌・プログラムの解説・批判などの影響もありうることなどは、調査結果の分析に当って当然考慮されねばならない条件であろう。調査対象は、当附属中学・高校生合計420名でその内訳は第1表のようである。

第 1 表

学年	中 1	中 2	中 3	高 1	高 2	合 計
男	59	51	27	65	39	241
女	49	49	27	32	22	179
計	108	100	54	97	61	420

Ⅲ 結果とその考察

(1) この映画は内容上からみて、観客に訴える幾つかの要素を包含している。そのいずれに対して生徒が感銘を受けたかをみようとしたのが問1である。これを集計したのが第2表であるが、こ

第 2 表 (%)

	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	無記入	計
中 1	3.7	30.6	0.9	15.7	18.5	27.8	1.9	0.9	100
中 2	4.0	18.0	4.0	12.0	12.0	39.0	6.0	5.0	100
中 3	1.9	18.5	3.7	11.1	9.3	42.5	9.3	3.7	100
高 1	0	14.4	1.0	6.2	19.6	43.3	7.2	8.3	100
高 2	3.3	19.6	6.6	4.9	13.1	23.0	21.3	8.2	100

れによると、中学1年では「親の愛情のありがたさ」(ロ)について最も多く、中学2年以後は協力し

あう仲間の友情(ハ)に最も多い反応が見られる。この結果は中学1年頃は親への依存関係がなお強く、以後青年期に入るに従って自我が確立されていくという精神発達の一般的傾向と相対応すると考えられる。なお高校2年で(ハ)が減少し、「その他」(ト)の回答が多くなっていることは、反応が一層分化してきたことを示すものである。山本教授を中心とする人々の学園建設の行動(ニ)が案外生徒に感銘を与えていないのは、映画の構成・脚色において比較的強調されていないことにもよるが、また、生徒が一層同世代の人々の行動に共鳴することを示すもので、子供をもつ成人を対象とした調査であれば、(ニ)がもっと多くなったのではないだろうか。

(2) この映画が観客に訴えている問題の一つは医学的に見離された小児麻痺の子供たちを社会的・教育的立場からいかに救うべきかということである。生徒たちはこゝで描き出された問題解決の方法をどう理解し、批判しているか。問2.はこの点を明らかにするためのものである。これを集計した第3表で、(ハ)の回答が中学から高校まで

第 4 表

	中 1	高 1
1. 母親の気持の中に入り込む—母親と自己の同一視 ○心配したが、走れてさぞうれしかったろう。……………	10.1	4.5
2. 母親の愛情を容認し、感激。 ○愛情に泣かされる、ありがたさ。……………	19.2	11.4
3. 母親の愛情を容認するが、教育法を批判。 ○母親の気持はわかるが、訓練が必要である。…………… ○母親の愛情はよいが、子のためにしたいことはさせよ。……………	32.5 30.5	11.4 20.5
4. 母親の愛情については触れない、教育法批判。 ○子のしたいことはさせなくてはいけない。……………	4.8	1.1
5. 母親の愛情を批判するが、行為には同感。 ○盲目的であるが、美しい。(うたれた。)……………	0	9.1
6. 母親の愛情を批判。 ○可愛がりすぎ、甘やかしすぎる。(単なる否定)…………… ○本当の愛を知らない、一般の母親と一緒にだ。(客観的に否定)……………	0 0	10.2 14.8
7. 母親の愛情を理論的には否定、人間性としては容認する。 ○人間性がよく出る、しかし盲目的な愛情だ。……………	0	11.4
8. 母親の愛情に対して批判を加えない、人間性として容認する。 ○あのようにするのが普通。……………	0	3.4
9. そ の 他。……………	2.9	2.2
合 計	100	100

表 3 表 (%)

	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	無記入	二つ記入	計
中 1	0.9	0	81.6	16.6	0.9	0	0	100
中 2	5.0	1.0	75.0	16.0	1.0	2.0	0	100
中 3	3.7	1.9	64.8	22.1	0	5.6	1.9	100
高 1	1.0	0	81.5	4.1	8.3	1.0	4.1	100
高 2	1.6	0	77.0	8.2	3.3	6.6	3.3	100

圧倒的に多いのは、小児麻痺の子供の救済を個人の問題にとどめず、社会の問題として解決しようとする態度の現われであって、問4.の回答においてもこの点をさらに強調しているものが非常に多いのである。これは生徒が社会科学習において得た原理的な知識・経験を映画内容と結びつけて、新しい社会的な問題解決の態度として再構成したものと見られないだろうか。

(3) 次にこの映画で強調されすぎているとさえ見える「親の愛情」について生徒の反応を見よう。問3.は自由表現法によったので、整理に当っては4名の調査者が各個別に分類したものを持

ち寄って、全員合議の上集計するという手続をとった。ここでは中学1年と高校1年の比較のみに止める。

第4表によれば、中学1年では多くのものが母親の行動を愛情のあらわれとして認めながら、その教育法について批判しているのに対して、高校1年ではこの行動を一層客観的な立場から批判するものが多くなっている。さらに高校1年では母親の行動を人間性一般として容認するものがかなりあるが、これは人間事象を更に高次の立場で理解する力ができてきていることを示すものといえよう。

(4) 全般的な感想を求めた問4. については多くの問題があるが、紙数に制限があるので、次の三点に限定して検討を試みよう。

まず映画をどのような態度でみているかを調べてみる。観客としての態度には、映画の中に没入して、映画中の人物と自己とを同一視するプリミティブな態度、内容を客観的に批判しながら反ぱつしたり感動したりする態度、さらに自己の生活ときり離して客観的にテーマや演出や演技を批判する態度などがあるが、中でも映画批評の態度は一応純粹に客観的な態度といえよう。映画批評を書いているものの数は中学1年で3%、高校1年では17%である。これは高校生における客観的な鑑賞態度の成長を示す一証左と考えられる。

次にこの映画が生徒の行動・態度にどのような変化をもたらしたかを調べよう。まず不具者に対する態度を反省して、中学1年の一生徒(男)は、次のようにいっている。

(例1.) 「今まで不具者をみると変な心持がしたが、これからは少しでも不具者を助け変なふうに思われないようにしてやりたい。」

同様な反省は高校1年にも見られる。

またこの映画を見て、自己の将来の希望や理想まで述べているもののあることも見逃し得ない。高校1年の一女生徒は次の様にいっている。

(例2.) 「私が強く感じたのは、女医さんです。……人間完成のために勉強するのだとも一方ではいわれていますが、一番大切なのは人々に奉仕する心ではないかと思ひます。私もこのような人になりたいと思ひます。」

このような例は中学1年にもみられるが、ここでは映画が生徒の自我の核心に食い入って、その理想をとらえ人生観をゆり動かそうとしている。われわれはここに映画の持つ積極的な効果を認めざるを得ない。

次に観覧前に行われた校長訓話が生徒の鑑賞態度にどのような影響を与えたかを見よう。中学1年の一女生徒が、

(例3.) 「校長先生がおっしゃったように、もっと皆が愛情をもって遊んだり勉強したりしてあげればよい。」

といっているのは、明らかにその影響であって、同様な事例は他にもかなり多く認められる。

IV. 結 び

以上を要約すると、次のようである。

- (1) 同じ映画をみても、年齢によって感銘を受ける内容を異にする。
- (2) 社会科などの学習で得た原理的な知識経験を映画内容と結びつけて、生徒が自らそれを再構成する場合がある。
- (3) 中学生よりも高校生の方が映画を一層客観的に批判的にみる傾向がある。
- (4) 映画は生徒の行動に変化をもたらす、時にはさらに自我の核心にまで迫って人生観をゆり動かすほどの力をもつことがある。
- (5) 事前指導は生徒の鑑賞の構えを特定方向に指向させる場合がある。

以上の結果を社会科教育とどう結びつけていこうかが次の問題である。映画内容を高校生が中学生よりも一層客観的な態度で受けとっているという事実は、社会科教育とマス・コミュニケーションの関係を追究していく上に重要な意味を持つであろう。また小児麻痺の子供の補導施設に関する生徒の反応にも見られるように、映画鑑賞において社会科の知識経験がどう生かされるかという問題や、映画の中で生起した問題を社会科学習の中でどう展開していくかという問題も大切である。

これらについては、さらに今後他のいろいろな角度から、また他の種々の領域について検討を続けたい。